



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報

No.32

発行日 2023年7月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ <http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/>

目次

巻頭言

佐賀大学農学部の現状と課題
佐賀大学農学部長 鈴木 章弘 … 1

第38回(令和5年度)農学部同窓会総会について … 4

同窓会表彰

同窓会長賞受賞によせて 新宮 仁大 … 7
成田 千紗 … 7
同窓会感謝状贈呈者(川副操氏)の紹介 … 8

農学部情報

恩師からのメッセージ 五十嵐 勉 先生 … 9
上田 敏久 先生 … 9
大島 一里 先生 … 11
林 信行 先生 … 13
新教授紹介 弓削こずえ 先生 … 15
古賀 豊司 先生 … 15
草場 基章 先生 … 16
古藤田信博 先生 … 16
徳田 誠 先生 … 17
光武 進 先生 … 17

ホームカミングデー 佐賀大学校友会 … 18

会員の広場

学習資料「一家に1枚 ウイルス
～小さくて大きな存在～」の製作監修に携わって
川久保修佑 … 18

山菜の栽培法と食べ方講座
①オオバギボウシ(大葉擬宝珠) 田中 欽二 … 19
植物保護学関係者新年会 成富 毅誌 … 20

支部だより

佐賀県支部 溝口 善紀 … 20
農業自営者の会支部 末次 博幸 … 21

同窓会からのお知らせ

会費納入のお願い … 21

編集後記 … 21

協賛広告 … 22

巻頭言



佐賀大学農学部の現状と課題

佐賀大学農学部長 鈴木 章 弘

(生物科学コース 作物科学グループ 作物生態生理学分野 教授)

はじめに

令和5(2023)年4月から農学部長を拝命した鈴木章弘です。よろしくお願ひいたします。佐賀大学農学部同窓会様には日頃から農学部ならびに農学研究科の教育研究活動にご理解をいただき、さらには学生の励みになる農学部同窓会長賞を授与して下さるなど、ほんとうに心温まるご支援をいただいていることに心から感謝申し上げます。さて、私が農学部長に就任してから長い月日が経っているわけではありませんが、把握している農学部の現状と今後の課題についてご紹介いたします。

組織

令和元(2019)年4月に農学部が1学科4コース体制になりました。それ以降組織の大きな変更はありませんが、コース内でのグループの形成や若干の名称の変更等が行われました。生物科学コース内に作物科学グループ、園芸科学グループ、植物保護科学グループおよび動物科学グループ、食資源環境科学コース内に環境科学グループおよび食資源科学グループ、生命機能科学コース内にバイオサイエンスグループおよびフードサイエンスグループ、そして国際・地域マネジメントコース内にはコース名と同

じグループが設置され、すべての教育研究分野はいずれかのグループに所属しています。また、農学部附属アグリ創生教育研究センターについては、佐賀市久保泉町のキャンパスを久保泉生物生産科学研究拠点、唐津市のキャンパスを唐津機能性資源研究拠点と称するようになりました。これらの変更は教育研究分野の名称が専門的過ぎて難しくわかりにくいという声に応えたもので、直感的に想像しやすくなったと好評を得ているところです。所属分野などの詳細は農学部のHP (<https://www.ag.saga-u.ac.jp/main/>) をご覧ください。

資源の有効利用

人的資源としては長らく行われてこなかった教員の昇任人事が認められ、令和4(2022)年4月に2名の教授と3名の准教授が、令和5(2023)年4月には4名の教授と1名の准教授が誕生しました。また大学が認めた特定分野の研究を推進するために、3年の任期付きではありますがプロジェクト助教(常勤職員)が採用され、令和3(2021)年11月に3名、令和4(2022)年6月に1名が農学部のメンバーに加わりました。ここ数年のうちに10名の昇任と3名の新規採用が為されたこととなります。多くの場合、人事の活性化は所属している教員のモチベーションの向上に繋がると考えられるため、今後もこれを継続できるように働きかけるのが学部長の使命と認識しています。

次に教育研究スペースとしての資源です。特筆すべきは農学部2号館、3号館の改修工事が令和5(2023)年3月に完了して4月から利用できるようになったことです(写真1)。2号館には熱帯作物改良学分野、3号館には国際・地域マネジメントコースの各分野が入居しました。建物の設計から複数回の引っ越しとたいへんな作業がやっと完了し、心機一転教育研究活動が行われているものと思います。次に、最近特に増加していた、いわゆる「飛地」の解消についてです。教員の退職や採用に伴ってそれぞれの教員の利用する研究スペースが1箇所にとまって存在せず、いわゆる「飛地」になっているケースが増加しつつありました。そこで昨年度から施設委員会を中心に話し合いを繰り返し、現時点で可能な限り「飛地」を解消するように研究室の引っ越し作業を行っています。これが完了すれば研究室をより効率的に利用することができるようになるため、今まで以上に教育研究が進展するものと期待しています。

受験生の確保

平成4(1992)年に205万人だった18歳人口は減少の一途を辿り、令和5(2023)年はほぼ半数の



写真1 改修が終了した農学部2号館と3号館

106万人でした。また令和4(2022)年の出生数が前年比で5万人以上減少し、とうとう80万人を切ったというニュースが世間を騒がせたのは記憶に新しいと思います。これは18年後の18歳人口が80万人に満たないということを意味します。このような状況の中、国立大学法人といえども受験生の確保に関しては決して安心できる状況にはありません。そんな中で佐賀大学農学部においても毎年志願倍率を注視しているわけです。近隣の大学では2倍に満たないなど厳しい状況の農学部も散見される中、幸いなことに佐賀大学農学部は直近4年間の前期倍率として2.8, 4.2, 3.0, 2.9と、ある程度高い値を維持することができています。私達教員はこれに慢心することなく、高等学校におけるいわゆる出前授業やオープンキャンパスなどでの広報活動に力を入れ、何より世間に強くアピールできるような良い研究を展開することが重要であると肝に銘じているところです。

国際化

佐賀大学における国際交流はここ数年、活動のかなりの部分が制限されてきました。しかしコロナ禍が終息に向かうに連れて活動が活発になりつつあります。協定校であるスペインのアルメリア大学とは教員の相互の訪問が実現し、バイオマス利活用に関する交流促進及び協力関係構築のための活動が始まりました。また4月末に中国駐福岡総領事が来学され、農学部の施設見学や意見交換が行われました(写真2)。農学部からは特色ある研究の紹介を行い、総領事からは中国の農業政策のレクチャーを受けることができました。佐賀大学としては大変良い交流

ができたと考えており、福岡総領事からも同様の言葉をいただいたと伺っています。国際交流についてはこれ以外にもさまざまなプロジェクトへ応募するなど計画を進めていることも多く、今以上に充実させていかなければならない領域だと考えています。

農学部の研究

佐賀大学は地域とともに発展していく大学を目指しているため、ここではそれにフォーカスした研究プロジェクトを紹介します。まず、佐賀大学では社会的なインパクトを創出するための戦略的な取り組みとして「佐賀大学ミッション実現プロジェクト」を令和4（2022）年度からスタートさせました。農学部教員が中心となっている課題としては「地域特化型農水産研究開発による佐賀地域の一次産業の安定化と振興」、「微細藻類バイオマス研究プロジェクト」の2件が採択され活発な研究活動が展開されています。また佐賀県は地域課題の解決や県内の産業、学術の振興を図り、佐賀の未来を創造していくプロジェクト「TSUNAGI プロジェクト」を推進していますが、それに採択されて佐賀県の課題解決のために4名の教員がプロジェクトの中心になって研究を推進しています。それ以外にも本学が特に戦略的に推進する地域課題の解決に資する事業として「地域みらい創生プロジェクト」に参画している教員も多数存在します。

研究を強力に推進するには研究費が欠かせません。日本中の研究者が応募できる研究費に科学研究費補助金、いわゆる「科研費」があります。本学における農学系の科研費の新規採択率の高さは特筆すべきものがあると思います。直近2年間の全学の採択率は20.3%、22.3%であったのに対し、農学系はそれぞれ33.3%、34.2%と高い値を維持しています。もっとも新規採択率の全国平均は30%弱であることを考えると、より一層気を引き締めて外部資金の獲得を目指す必要があります。そうすることが佐賀大学の教育、研究に資することになるのは間違いありません。

今後の課題

＜教育＞

令和5（2023）年3月に1学科4コース体制になって初めての卒業生を輩出しました。今後、目標としていた「幅広い素養と実行力を身につけ、社会



写真2 中国駐福岡総領事との意見交換会の様子、窓側中央が律桂軍総領事。

の変化に翻弄されない、しなやかな知性を習得した学生」を育成できたか検証し、問題点を改善していく必要があります。

＜研究＞

研究面では、これからも人のためになる研究、地球環境を守るための研究を推進していくことが重要だと考えています。

＜社会貢献・国際化＞

2年前からステークホルダーとの密な情報交換を推進してきたため、それを継続し、可能であれば自治体だけでなく、地域の企業や個人への貢献を進めたいと考えています。また、今以上に開かれた大学を実現するために、「地域住民へのオープンキャンパス」の実施も検討する必要があると思います。また国際交流に関しては、協定校を中心に、積極的な学生交流、研究者交流を図っていくことが重要であると考えています。

おわりに

頻発している異常気象に加えてコロナ禍が発生し、私たちは物資の輸入が停止してしまう現実を目の当たりにしました。さらに、追い打ちをかけるようにウクライナ紛争が勃発して穀物価格や燃料価格、肥料の原料価格の高騰が増長され、食料やそれを生産するための資材の調達が現実問題として困難になりつつあります。このような日本の食料安全保障が危機的状況にある今こそ、農学部の存在価値が問われていると思います。佐賀大学農学部はこれからも「人と地球を守る農水産学研究」を推進して参ります。今後とも農学部同窓会様からの熱いご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

第38回（令和5年度）農学部同窓会総会について

今年度は新型コロナウイルス感染症の感染法上の分類が第5類に引き下げられたことから、5月13日（土曜日）に令和元（2019）年以来4年ぶりに会員が一堂に会する形での総会を開催することができました。当日の出席者は38名（+委任状267名）でした。総会終了後に、農学部の鈴木学部長と徳田教授による講和、さらには懇親会までと盛沢山で、有意義な時間が流れました。県外からの帰省を兼ねてご出席された会員もおられ、久しぶりの再会、そして盛り上がった歓談で皆さま楽しく過ごしていただくことができたものと思います。今回、初めての取り組みとして、総会に先立ち、学内散策を催しました。「産学交流プラザ」では、佐賀大学が世界に誇る高いレベルの研究成果を目にすることができました。残念ながら今回の総会を欠席された皆さまにおかれましても、今後の同窓会行事にぜひともご参加いただきますよう、お願い申し上げます。

なお、総会資料につきましては、同窓会ホームページに掲載しております（閲覧パスワード：2023Soukai38）ので、本会報では詳細は省略させていただきます。
農学部同窓会会長 森田 昭（S52卒 農学・農経）

令和4年度事業報告及び収支決算

(R4.4.1～R5.3.31)

■事業報告

令和4（2022）年度も新型コロナウイルス感染拡大によって各種行事の中止など、活動に制約を受けることが多かった一年でしたが、会報「ありあけ」第30号、31号の発行をはじめとした会員間の絆醸成に寄与する活動を進めました。

また、在学生支援活動においては、在学生への就職支援を目的とした同窓会と在学生との交流会、大学と同窓会の意見交換会、農業版MOTへの協力支援を継続しました。

さらに、農学部同窓会の円滑な運営と支部活動の充実に努めました。

■収支決算

(1) 一般会計

【収入の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和4年度 決算(B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	217,177	217,177	0
会費	3,580,000	2,788,899	-791,101
学生(新入生)	3,080,000	2,275,000	-805,000
一般会員	500,000	513,899	13,899
雑収入	80,003	159,021	79,018
特別会計戻入	622,820	615,018	-7,802
計	4,500,000	3,780,115	-719,885

【支出の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和4年度 決算(B)	比較増減 (B-A)
事務費	1,160,000	600,434	-559,566
会議費	240,000	107,500	-132,500
事業費	800,000	819,725	19,725
組織強化費	330,000	100,720	-229,280
全学同窓会負担金	1,540,000	1,274,000	-266,000
特別会計への繰出金	370,000	480,500	110,500
学生入会金	70,000	45,500	-24,500
学生平準化準備金	300,000	435,000	135,000
予備費	60,000	0	-60,000
計	4,500,000	3,382,879	-1,117,121

※収入3,780,115円-支出3,382,879円=397,236円(次年度繰越)

(2) 特別会計

【収入の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和4年度 決算(B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	14,449,506	14,449,506	0
一般分	6,776,383	6,776,383	0
会費平準化準備金	7,673,123	7,673,123	0
入会金	70,000	45,500	-24,500
会費平準化準備金	300,000	435,000	135,000
雑収入	264	137	-127
計	14,819,770	14,930,143	110,373
一般分	6,846,515	6,821,889	-24,626
会費平準化準備金	7,973,255	8,108,254	134,999

【支出の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和4年度 決算(B)	比較増減 (B-A)
繰出金	622,820	615,018	-7,802

※収入14,930,143円-支出615,018円=14,315,125円(次年度繰越)

令和5年度事業計画及び収支予算

(R5.4.1～R6.3.31)

■事業計画

今年度は新型コロナウイルス感染症の感染法上の分類が第5類に引き下げられたことから、会員相互の親睦と融和の増進に重点を置きながら、在学生への支援を通じて母校佐賀大学農学部の発展に寄与する活動を継続して行っていきます。

また、在学生への支援においては、これまでの農学部との意見交換会の結果を受け、インターンシップやマルシェ活動への支援強化や海外大学との研究連携への支援制度の新設などに取り組み、在学生にも一層身近に感じられる同窓会を目指していきます。

■収支予算

(1) 一般会計

【収入の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和5年度 予算(B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	217,177	397,236	180,059
会費	3,580,000	2,810,000	-770,000
学生(新入生)	3,080,000	2,250,000	-830,000
一般会員	500,000	560,000	60,000
雑収入	80,003	80,010	7
特別会計戻入	622,820	1,027,754	404,934
計	4,500,000	4,315,000	-185,000

【支出の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和5年度 予算(B)	比較増減 (B-A)
事務費	1,160,000	840,000	-320,000
会議費	240,000	750,000	510,000
事業費	800,000	690,000	-110,000
組織強化費	330,000	320,000	-10,000
全学同窓会負担金	1,540,000	1,260,000	-280,000
特別会計への繰出金	370,000	405,000	35,000
学生入会金	70,000	45,000	-25,000
学生平準化準備金	300,000	360,000	60,000
予備費	60,000	50,000	-10,000
計	4,500,000	4,315,000	-185,000

(2) 特別会計

【収入の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和5年度 予算(B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	14,449,506	14,315,125	-134,381
一般分	6,776,383	6,821,889	45,506
会費平準化準備金	7,673,123	7,493,236	-179,887
入会金	70,000	45,000	-25,000
会費平準化準備金	300,000	360,000	60,000
雑収入	264	136	-128
計	14,819,770	14,720,261	-99,509
一般分	6,846,515	6,866,957	20,442
会費平準化準備金	7,973,255	7,853,304	-119,951

【支出の部】

単位：円

科目	令和4年度 予算(A)	令和5年度 予算(B)	比較増減 (B-A)
繰出金	622,820	1,027,754	404,934

5月13日の風景

同窓会当日は小雨の中、学内散策から始まりました。雨に濡れたメタセコイア並木の芽吹きがきれいでした。大会館内の生協で昼食のカレーをいただき、その後、産学交流プラザのインフォメーションコーナーと大学美術館を訪れました。総会終了後には、鈴木学部長（農学部の現状と今後）と徳田先生（学生とカラスやカモを追いかけて：生物多様性と鳥獣害対策）からの素晴らしい講話を拝聴しました。懇親会はご覧のとおりの上り上がりでした。



参加者一言メッセージ

同窓会総会に参加された皆さまからのメッセージを掲載しています（編集の力不足で、すべての方の掲載ができておりません。ご了承のほど、お願いします）。

来賓の先生方

鈴木学部長：今回紹介した以外に、たくさんの素晴らしい研究成果がある。

近藤文義先生：8年ぶりの参加。農学部としての広報活動をもっとやっていかないといけない。

徳田誠先生：同窓生の皆さん、仲がとて面白い。皆さんのパワーをいただいて元気になった。

卒業生

高木 胖 (S36)：鈴木学部長と徳田先生、お二人のお話がとても良かった。

田中 欽二 (S39)：待ち遠しかった。いろいろの人と話せて、楽しかった。

野口 好啓 (S41)：同窓会から感謝状をいただいていたが、これまで総会がなくて、お礼を言う機会がなかった。今年80歳。田んぼを9ha頑張っている。

渡辺 巍 (S43)：50年ぶりの佐賀大学キャンパス。ユニバーシティらしくなっていて、びっくり。感動。高木胖先生と話すために来た。

田窪 一隆 (S44)：もう77歳になる。柳川から来た。有明海沿岸道路のおかげで佐賀までとても近くなった。これまで同窓会はほぼ皆勤。

内海 修一 (S47)：先輩から若手までのつながりができる同窓会は素晴らしい。同窓会と大学との距離が近くなっていることを感じる。

大久保 惇 (S47)：大学が変わったことを実感できた。

荒川 典昭 (S48)：卒業して50年になる。大学散策で、地域に根を張った佐賀大学の姿を知ることができてよかった。

山田 和由 (S49)：来てよかった。農業を営んでいる自分にとって、佐賀大学の研究を身近に感じることができた。

森田 博子 (S50)：井尻さんに誘われてきました。よかったです。

井尻美智子 (S50)：神奈川からきました。森田さんと森崎さんに会えてよかった。

森崎 育男 (S50)：東京から来た。とても懐かしい。

水田 和彦 (S51)：4年ぶりの総会と懇親会、とても嬉しい。全学同窓会長として、佐賀大学のすばらしさを実感している。ダイヤモンド半導体、素晴らしい。ノーベル賞を期待。大学を支援しているのが同窓会。

森田 昭 (S52)：総会が無事に終わって安堵した。遠方からも参加されてよかった。融和と親睦を図る懇親会を開催できたことが最高によかった。

熊谷 正司 (S53)：総会の議長がずっと気になっていた。飲みに行くことが少ないので、同窓会の懇親会は楽しい。

溝口 善紀 (S53)：鈴木学部長の話、よかった。佐賀大農学部のレベル（受験偏差値と研究）が高いことに感動した。

末次 博之 (S54)：期待した通りの素晴らしい同窓会。農業自営者の会を盛り上げていきたい。

緒方 和裕 (S55)：多くの先輩とお会いできて、たくさんお酒が飲めて、楽しい。もっとたくさん集まってもらいたい。

平山 伸 (S60)：いろんな方と知り合えてよかった。佐賀大学のことがよくわかる産学交流プラザにぜひ来てほしい。

田代 浩幸 (S61)：大学散策がとても良かった。新たな発見で、大学の発展を感じることができた。県庁支部長として、会員、特に若い会員の同窓会への関心を高めていきたい。

江島 博文 (S62)：来年以降、気合を入れて教職員の参加者を増やしたい。

松尾 信寿 (S63)：今日は最高。顔を合わせて話すことが大切。

三原 聖子 (S63)：4年ぶりの総会、皆さんエネルギーで楽しい。

井上 賢二 (H3)：初めて参加した。こんな機会がないと大学に来ることがない。来るきっかけが同窓会。

田中 宗浩 (H4)：30代、40代の卒業生が気軽に大学に来ることのできる状況を作りたい。

今江 義則 (H10)：4年ぶりの総会、同窓会理事としてできるだけ準備はした。若い人が参加しやすい新しい企画を考えたい。

小池 由恵 (H13)：お元気な先生方、先輩方とお会いできてよかった。後輩にも声をかけたい。

太田 美加 (H19)：田中宗浩先生に会いに来た。若い自分たちが同窓会を盛り上げていきたい。

■■ 同窓会長賞受賞によせて ■■

令和4（2022）年度の同窓会長賞に2名が選ばれました。佐賀大学同窓会長賞が「新宮 仁大」さん、そして、農学部同窓会長賞が「成田 千紗」さんに授与されました。いずれも優れた研究成果はもちろんのこと、課外活動における社会貢献が高く評価されています。ほんとうにおめでとうございます。お二人とも4月からは進学されていて、研究に励んでおられることと思います。今後なお一層の御活躍を期待するとともに、本学同窓会のことを気にかけていただき、お支えくださいますようお願い申し上げます。

佐賀大学同窓会長賞

農学研究科 生物資源科学専攻 生物科学コース

新 宮 仁 大

この度は佐賀大学同窓会長賞というたいへん名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。私は卒業研究で、佐賀平野におけるハシブトガラスとハシボソガラスの生態についての研究を行いました。



これら2種の在来カラス類は開発地域に適応した生物で、人間にとってとても身近な生物です。しかし、在来カラス類の生態について、これまで佐賀県を含む九州で行われた研究は限られており、生態についての詳細な知見はほとんど集められていませんでした。カラス類はしばしば農業被害や生活衛生被害をもたらす有害鳥でもあるので、被害を低減して人間とカラスが共存する社会を作る上でも生態に関する知見を蓄積することはとても重要です。

そこで、佐賀市において繁殖期の営巣生態を含む在来カラス類の基礎生態について調査を行いました。

その結果、ハシボソガラスに比べてハシブトガラスの方がより高い位置に営巣がみられること、これまで他の地域ではほとんど確認されていなかった巢の再使用を複数確認できたことなど、佐賀市のカラスについて新たな知見を得ることができました。また、得られた研究成果について、地方自治体や民間企業の会議および学会に参加して発表しました。

その他にもカラス被害低減のための実証実験や、有明海でノリへの被害が問題となっているカモ類の基礎生態についての研究、また県内の小中学生を対象とした生物多様性に関するイベントに携わらせていただくなど、貴重な経験をいくつもさせていただきました。これは指導教員の徳田教授をはじめ研究室の先輩や同輩、市役所の方々、地域の方々など、本当に多くの皆様のご指導とご協力の賜物であると考えております。この場をお借りしてお世話になった皆さまに心より感謝申し上げます。

令和5（2023）年4月からは名古屋大学大学院環境学研究科に進学し、小型の記録計を生物に直接装着して自然状態の動きを記録・分析するバイオリギングという手法を用いて、引き続きカラスの生態についての研究に励んでおります。佐賀大学で学んだ知識や経験を活かし、お世話になった方々に恩返しができるようにこれからも精進していく所存です。

農学部同窓会長賞

生命機能科学コース バイオサイエンスグループ 機能高分子化学分野

成 田 千 紗

この度は、佐賀大学農学部同窓会長賞という名誉ある賞をいただき、たいへん光栄に存じます。私は学部4年生の時に第38回日本DDS学術集会・学生研究企画コンテスト「君の研究所を創ろう」という公募に応募し、ここでの功績を今回の受賞の際に評価していただきました。



このコンテストの存在を知った時、自分是他の人より優れたアイデアを創出することができないと考え、断念しようと思っていました。そんな時、知人

もこのコンテストへの応募に向けて準備を進めていることを知り、自分も諦めずに挑戦してみようと思いました。アイデアの創出には研究室で学んだことが役立ちました。私が所属する機能高分子化学研究室の宗伸明先生は新規グルコース検出材料の開発に取り組みされてきました。研究室配属後は、酵素を用いたグルコース検出手法の仕組みについて丁寧にご教授していただきました。このことをきっかけに、糖尿病の治療の際に用いられているグルコースセンサーや血糖コントロール手法について興味を持ちました。調べているうちに、糖尿病患者は1日に複数回、血糖値を測定しなければならず、それが負担となっているということを知り、毎日行う歯磨きで血糖値をコントロールできる手法があれば治療負担を軽減できるのではないかと考えました。コンテストでは、歯磨きDDS（ドラッグデリバリーシステム）としてこのアイデアを発表し、好評をいただくこと

ができました。

ここでの功績がこの度の同窓会長賞に繋がったのも、私にきっかけを与えてくれた友人や、熱心にご指導して下さった宗先生のおかげです。この場を借りて心から御礼申し上げます。

この4月から、私は佐賀大学の大学院に進学し、

宗先生のもとで研究を続けています。受賞により、挑戦することの大切さを再認識することができました。今後も何事にも諦めず挑戦し、研究にも根気強く取り組みたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

同窓会感謝状贈呈者の紹介

令和4(2022)年度の佐賀大学農学部同窓会感謝状贈呈者は、佐賀県支部から推薦のあった「川副操氏(昭和44(1969)年農業土木学科土地改良学教室卒)」に決定しました。

5月13日に開催された第38回同窓会通常総会の場で感謝状が森田会長から授与されました。この誌面で、川副操氏のご功績の概要を紹介します。

川副操氏は佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部の推薦を受け、平成26(2014)年度から29(2017)年度までの4年間にわたって農学部同窓会の会長として、会の活性化に尽力されました。この間、「佐賀大学農学部創立60周年記念行事」を主導され、「在学生と教職員・卒業生の交流会」の開催や柱時計の贈呈に尽力されました。さらに、学部・学生が元気になるようにと、みんなで口ずさむことのできる歌の作成を提案・企画され、歌詞の募集から選考、贈呈について情熱を注がれ、後世に残る二つのすばらしい歌「佐賀大学農学部学部歌」、「佐賀大学農学部学生歌」が完成しました(以上については同窓会報ありあけNo.18の4ページ目に紹介されています。農学部同窓会HPからご覧ください)。

さらに、平成30(2018)年度からは佐賀大学の

各学部同窓会長の推薦を受けて、令和3(2021)年度までの4年間、全学同窓会会長として会を統率されるという重責を担われました。この間、いっそうの組織強化を図られるとともに、同窓会への若手の参加の取り組みに尽力されました。また、コロナ禍のなかで、同窓会活動は多くの行事が中止せざるを得なくなり、活動が困難な状況になったにもかかわらず、役員会のオンライン開催など、前向きな対応に努められました。

以上のように川副操氏の同窓会活動におけるご功績は多方面にわたっており、極めて偉大なものがあります。改めまして、今回の受賞をお慶び申し上げますとともに、ますますのご活躍とご健勝を祈念するものであります。

田代 暢哉(S54卒 農学・病理)



川副操氏への感謝状の贈呈

農学部情報

恩師からのメッセージ

今年の春、佐賀大学を退職された4名の先生方から、同窓会員に向けて貴重なメッセージをご寄稿いただきました。先生方にはこれまで同窓生が賜ったたくさんのご指導、ご高配に心から感謝申し上げます。先生方のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

定年退職のご挨拶

五十嵐 勉

この3月で佐賀大学を定年退職いたしました。

平成元（1989）年4月、旧教養部に一般教養の「地理学」担当教員として着任しました。その後の大学設置基準の大綱化に伴う教養部の廃止にともなって、平成8（1996）年に農学部・農学研究科に配置換えとなりました。農学部では、農業経済学・経営学研究室と地理学・文化人類学研究室による資源社会管理学講座という社会科学系の教育研究分野でお世話になりました。特に、中山間地域の農山村をフィールドとした地域資源の保全と活用をテーマに学生と共



に地域で汗を流しながら村づくりに関わってまいりました。改組前の旧付属農場の教員・技術職員・学生たちと、唐津市相知町の「蕨野の棚田」での援農・棚田保全活動は農学部在職中の良い思い出です。

農学研究科の改組に伴う全国初の農業技術経営管理学（農業版 MOT）の副コースと社会人対象の特別課程の設置に関わり、研究科の教員の皆さまのご協力を得て、100名相当の修了生を輩出し、皆さんが農業および農業関連産業で活躍されておられることも嬉しく思っています。また、この事業に際しては農学部同窓会からの多くのご支援を頂き、厚くお礼申し上げます。

4月からは、佐賀大学の非常勤講師として、専門科目と教養科目の授業を引き続き担当しています。また、週末は蕨野の空家を借りての週末帰農・二地域居住暮らしを楽しんでおります。農学部同窓会の今後の発展と皆様のご健康をお祈りし、退職のご挨拶とさせていただきます。



蕨野棚田『手間講隊』 2003年4月13日

平成15（2003）年4月13日 相知町蕨野棚田での援農活動（手間講隊）開始



平成23（2011）年6月4日 相知町蕨野棚田での農学部学生による田植え

佐賀大学農学部での四半世紀

上田 敏久

平成8（1996）年10月に佐賀大学教養部から異動後、令和5（2023）年3月で退職するまでの27年間余りを農学部で過ごした。途中の2年間九州大学の研究所に所属していたため、正確には25年間農学部在籍したことになる。実に四半世紀である。

講義の話

私は理学部化学科の卒業であることから、基礎科目にあたる『化学』や『有機化学』などの講義を主に担当してきた。『化学』の講義の中には『原子軌道』などの話も登場することから、「なぜ農学部でこんなことを勉強するのだろうか？」と学生は不思議に思っていたかもしれない。しかし、農学部の研究対象の多くは化学物質と直接



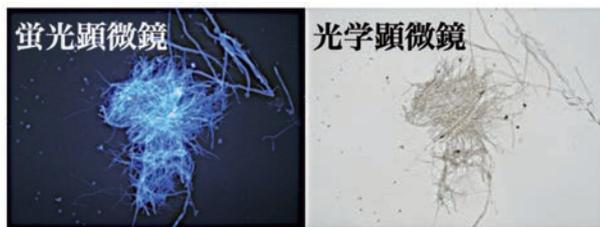
的に間接的に関係していること、さらに、生物のからだは見方を変えると、化学物質の集合体であることなどを考えると、農学部で学習や研究を進めるには、化学の知識を持っていることが重要である。学生がそのことに気付いてくれたならば、嬉しい限りである。

ちなみに、前出の『原子軌道』の話は『分子の形』の話に繋がって行く。タンパク質や糖質、そして毒や薬では、分子の形はたいへんに重要である。

研究の話

私は大学の卒業研究以来、ペプチドやアミノ酸を研究してきた。これらの物質は生物学と化学の両方で研究される物質であり、農学部に適した研究対象である。何か面白いテーマはないだろうかを探していると、ある雑誌で「21世紀はカビの時代である」という文を見つけた。「これだ!」と、抗カビ性ペプチドをテーマとして採り上げることにした。

生け花でも使われるヒモゲイトウ(学名: *Amaranthus caudatus*)の種子にはAc-AMPと呼ばれる抗カビ性ペプチドが含まれている。このペプチドはカビの細胞壁の多糖成分のひとつであるキチンに結合する性質がある。そこで、Ac-AMPに蛍光性分子を結合させたものを合成し、カビに振り掛けてみた。その結果が次の顕微鏡写真である。カビの菌糸が青く光っているのがわかる。



このAc-AMPを題材として研究を続けてきた。ある年の卒業研究で、Ac-AMPの構造を参考にした抗カビ性化合物をデザインし、その合成に挑戦した。残念ながら目的としていた化合物は得られず、その意味で実験は失敗であった。しかし、学生が作ったサラサラで真っ白な粉末は、見た目がきれいなだけでなく機器分析的にもきれいであった。そこで、念のために抗カビ活性を測定してみた。その結果はまったくの予想外で、学生が得た化合物は一つのアミノ酸に二つの別のグループ(基)が付いただけという簡単なものであったにもかかわらず、抗カビ活性をもっていた。失敗したと思われる実験でも、もう一步食い下がってみると、面白いことになるかもしれない。この実験結果は世に言う‘Serendipity’であった。

委員会の話

大学教員は学部または全学の事務仕事にも携わっている。私は、全学の教務関係の仕事が長かった。この仕事は一度足を踏み入れるとなかなか抜け出せないということを、身をもって体験した。佐賀大学で現在おおいに利用されているラーニング・ポートフォリオやGPAが導入された頃の委員の一人である。当時の学生に「先生はいつも会議でしたね」と卒業後に言われたことを覚えている。一日に4会議、休みと食事を挟んで7時間続いた打合せ、会議のダブルブッキングなどを経験した。

一方、ホンワカとした仕事の経験もある。佐賀大学広報室に所属していた時期に、佐賀大学公式マスコットキャラクター「カッチーくん」を更に広めようと計画した。それはLINEスタンプやピンバッジという形で実現した。佐賀大学広報誌「かちがらす」でも紹介されたが、現在のところLINEスタンプ以外は手に入りづらいのが残念である。なお最近、LINEスタンプ第二弾が発売されている。



学びの話

「学問に王道なし」…この言葉は紀元前のギリシャの数学者ユークリッドのものとして知られている。この言葉は現代でも生きているのだろうか?

新型コロナウイルスの感染拡大はICT教育の導入・利活用を加速した。そして、一見、学習は容易になったようである。しかし、実際は、『学び』を導いてくれる手段が地図からナビに代わっただけであろう。大昔も現代も、学びの道のスタートからゴールまでの距離に変わりはない。むしろ学ぶべきことは増えており、効率的な学びの必要性はますます高まっている。ICTはその問題を解決するための『一助』として期待されているが、物事を理解するにはやはり本人の努力が必要である。

『学び』とは脳の実技であり、練習によって着実に確実に身に付けていかなければならないという点で、スポーツや楽器などの実技と同じであろう。

「学問に王道なし」は死語ではない。今こそ、この言葉の意味を再認識し、自分の学びの道を意識するべきである…と考えつつ、四半世紀の教員生活を終えた。

最後になりましたが、農学部の皆さま、長い間ありがとうございました。この文を書く機会を与えてくださった農学部同窓会に感謝いたします。

佐賀大学農学部での30年

大島 一里

赴任と辞令

約30年前、10年間を過ごした札幌を去る日がきました。北海道大学農学部校舎、確か南側の出口で当時の仲間に最後の挨拶をして、夕方愛車で妻と九州に出発しました。その後、苫小牧港発のフェリーにりましたが、悪天候でも揺れたことを覚えております。船内では倉本聰の「北の国から」が再放送されていました。翌朝八戸港へ到着し、その後私の故郷の盛岡市で一泊、八王子市で一泊、長浜市で一泊、そして次の日ようやく佐賀市に無事到着しました。約2,000 kmのドライブでした。翌日には、佐古宣道先生が「はがくれ荘」（現在のホテルグランデはがくれ）に会いに来てくださりました。それが、私の佐賀での人生の始まりでした。

平成4（1992）年5月1日、農学部長の田中典幸先生から辞令を受取りました。生命機能科学コースの濱洋一郎先生と一緒に受け取ったことを覚えております。その後、佐古先生が様々な先生方の研究室に連れて行ってくださり、そこで渡邊啓一先生にお会いし、佐賀大学の教員として初めて研究の話で盛



り上がったことを覚えております。

歓迎会と新年会

赴任してきての2日目でした。佐古先生、田中欽二先生、病理学研究室の卒業生、そして佐賀県にお勤めの方々が歓迎会を開いてくださいました。1次会、2次会そして3次会と、これが佐賀方式かと思いつつ愛敬町で飲み歩き、日の出の公務員宿舎に戻ってきたのは、午前2時を過ぎていたと記憶しております。JRコンテナで送られてきた札幌からの荷物をほとんど解いておらず、夜中に解いて何とか寝ることができました。それ以来、妻には頭が上がりなくなり、一方で佐賀の素晴らしい同窓生の皆さんに受け入れて頂きました。翌年の平成5（1993）年1月に初めて植物病理学教室の新年会に参加させて頂きました。月日が過ぎるのは早いものです。令和5（2023）年1月にはほぼコロナ収束として久しぶりに新年会が開催されました。

学会と学長

佐賀大学に在職中の大きな出来事の一つです。30年前の学会の全国大会は、大きな大学がある大都市で行うのが慣例でした。平成8（1996）年4月に日本植物病理学会が佐賀大学で開催されました。これまで学会の開催された地方都市としては最小で、後に「佐賀大学でできたなら、日本中どこの大学でも開催できるな」と学会の多くの仲間に言われました。皮肉か賛辞か、私は今でも後者と信じています。ただ、たまたま佐賀に寒波が押し寄せ、「佐賀はこんなに寒いのか、服装を間違えた」とも言われました。最終的に800名以上の参加があり学会は無事成功裏に終わりました。しかし、ここに至るまでには、大きな出来事がありました。開催予定の2か月前に、「佐古農学部長」が「佐古学長」になられたのです。全国大会の開催準備がどれだけたいへんであるのか、以前の大学で経験し身に染みていました。ですので、



平成5（1993）年1月3日 新年会



令和2（2020）年1月4日 新年会（ひしの実会）



平成9（1997）年3月 卒業式後の祝賀会

学長になられる前に「学会と学長のどちらを取りますか」と座っていらっしゃる佐古先生の背後からお聞きしたのを覚えております。先生も学長就任の記者会見で「青天の霹靂」と仰っておりましたが、私の方を振り返らず少し戸惑いながらと思いますが、「どちらも断れない」と言われたのを記憶しております。当然の回答ですが、私は30代半ば、随分失礼なことを聞いたものだと思いましたが、後々後悔しました。

研究室の立ち上げ

さて、佐古先生の学長への突然の就任でしたので、自分の生涯の研究テーマはまだ決めていませんでした。無人島にポツンと一人置いて行かれたような気がしました。しかし、これが私を成長させるとも大きな切っ掛けとなりました。私が「これで研究者として生きていける」と感じた最初の原著論文はウイルス学の世界3大専門誌でもあるイギリス微生物学会の *Journal of General Virology* に掲載されたものでしたが、平成14(2002)年のことで既に赴任後10年が経過していました。

研究者としての出会い

海外留学が叶わなかったため、長期が無理なら短期でもと考へ、国際学会に積極的に参加し、それが切っ掛けとなって生涯国際共同研究を沢山することになりました。平成11(1999)年8月にシドニーで開催された国際ウイルス学会で、当時我々の研究の世界では知らない人がいない Adrian Gibbs 博士に源右衛門のテーブルクロスをプレゼントに持ちながら突然声をかけ、「投稿予定の論文をレビューしてください」とお願いしました。彼は研究者としてヒョコ同然の私を1人前に扱ってくれました。オーストラリア在住の世界的な研究者に巡り会えたことから、私もその超一流の流れについて行こうと必死でした。それが私を一人前の研究者に押し上げてくれたものと信じています。

その出会いから平成23(2011)年に3度目にお会



平成12(2000)年3月 佐賀市内の居酒屋にてGibbs 博士と

いした時、「あなたは植物ウイルスの研究で新しい時代を切り開いた」と仰ってくださりました。お世辞かもしれませんが、その言葉が現在の私の研究者としての誇りです。

学生との出会い

素晴らしい思い出ばかりです。長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場にジャガイモを収穫に何度も学生と一緒にいったこと、そして様々なところに釣りにいったことが大きな思い出です。ほんとうにお世話になりました。現在は同窓生でもある卒業生といつの日かお酒でも飲みながら、当時を振り返って笑談したいと思います。



平成22(2010)年5月 長崎県愛野馬鈴薯支場でのジャガイモ収穫

退職前の最後の2年間

社会で活躍できる学生を育てたいという気持ち、佐賀大学に研究で貢献したい、世界に貢献したいという気持ちで毎日を過ごしてきました。その間、自身だけの力は小さいことも知りました。100名以上の優秀な卒業生と修了生に恵まれ、研究では多大な協力をしてもらいました。

退職前の最後の2年間はコロナ禍の真ただ中で、学部長を拝命しました。自身の研究は一端中断し、農学部の将来、そして同窓生が多く働いている佐賀県との関係を第一に考えました。学部は組織なのですが、一方で「個」の集まりですので、まずは特に若手の先生方が伸び伸びと教育と研究ができ、そして社会の現場で活躍できることを考えました。学部長就任初期に若手の先生方を回り、お一人お一人からお話を聞く機会を設けたのもその一つの理由です。自分では精一杯努力してきたつもりですが、私が皆さんに最後にお伝えできることがあるとすれば、「個」の力は重要で個人としてはその努力を惜しまないこともとても大切ですが、組織として人が集まることで、とてつもない大きなエネルギーが生まれることもあるので、こちらを忘れてはならないとい

うことです。

同窓会も組織の一つです。農学部同窓生がますます世界中で活躍されること、そして農学部が大学とともに発展することを祈念して、私の挨拶に代えさせていただきます。これからは農学部と同窓会をステークホルダーとして支えていきたいと思っています。



令和元（2019）年9月 熊本県天草市へのつり旅行

佐賀大学での約30年を振り返って 林 信行

令和5（2023）年3月で退職しました林です。平成5（1993）年9月に着任以来、29年半にわたり皆様にはたいへんお世話になりました。ありがとうございます。10日ほど前に「在職中の思い出や現在の思い出などを綴って、同窓生に熱く語って欲しい」とのメールをいただき、明日を締め切りにひかえ、さて何を書こうかと未だに思い悩んでいるところです。が、思いつくままに何か書いてみようと思います。

約30年前に助教授として着任した生物資源利用学研究室は北棟の1階西側にありました。旧園芸工学研究室が改組によって学科が異なる2つの研究室に分かれて生まれた研究室で、藤田修二先生と私の助教授2名で構成される研究室でした。教授・助教授・助手（+技官）から構成されていた旧講座制から来た自分にとっては新鮮でしたが、何かと戸惑うことの方が多かったと記憶しています。一研究室が二分されて生まれた研究室は2人で6スパンしかなく、実験室の一角を本棚で仕切って1/4スパン程度の居室スペースをなんとか確保して佐賀大での研究生活がスタートしました。この狭隘なスペースでの研究生活は13年後に北棟の改修工事が完了するまで続き、南棟に1スパンの居室を手に入れた時はとても嬉しく、子供部屋を手に入れた時の子供達の喜びがよく理解できました。

前任校では熱熔融させた天然高分子の流動特性を調べていました。明治製菓のカール（スナック菓子）の加工原理を思い浮かべただけであれば理解が容易かと思えます。エクストルーダーという押し出し装置に投入された原料トウモロコシは搬送スクリーンによる強力な剪断力を受けながら200℃・数十気圧と

いう高温高圧状態に達し、この時タンパク質や澱粉のような天然高分子は熱熔融して流体へと相変化します。身の回りのプラスチックが熱で溶けていくあの感じです。カールの製造では原料投入から吐出までの時間は10秒程度と非常に短く、この間に熔融による流体への相変化と澱粉の糊化などの反応が完了し、ノズルから大気圧環境下に吐出した瞬間に自由水が水蒸気になって一気に膨化してあの組織が形成されます。このような天然高分子の熱熔融挙動は当時からよく知られ、食品製造にも応用されていましたが、熔融した天然高分子の流動学的特性は未解明の部分が多く残されていました。そこで熔融粘性を測定するための粘度計を数年がかりで設計・試作して、天然高分子の流動特性を調べるのが前任校でやっていた仕事でした。この時のポイントは沸点を遙かに超える温度帯で、試料からの水の散逸を防ぎながら非常に大きな熔融粘度を測定するというところにあり、他に類がない粘度計を苦勞して試作することで、熱熔融流動特性解明を可能とし、水が重要な役割を果たしていることを明らかにしました。佐賀大へ移り、こちらでも続きの実験を行えるとよかったです。油圧駆動で動作する試作装置は実験室の天井近くまであるような大がかりな装置で移設が難しかったこと、後任者が続きの研究を行うことになったなどの事情から、佐賀大に着任してからは手探り状態で新しい研究テーマの再構築に取り組むことになりました。

そんな中、何気なく参加した鳥栖の九州工業技術研究所（現：産業総合研究所九州センター）の所内見学会で、坂木剛博士との運命的な出会いを果たすこととなります。九工研ではそれまで行ってきた石炭液化の研究が一段落し、化石燃料と違って国内でも確保が可能な植物系バイオマスのエネルギー利用を中心課題とした研究をスタートさせようとしている時期でした。九工研がその変換手法としてキータ

クノロジーとしていたのが「加圧熱水処理法」でした。加圧熱水とは高温高压の液相の水を言います。水の蒸気圧は昇温によって2次関数的に増加しますが、蒸気圧より高い圧力をかけ続ければ沸点以上の高温域でも液相を保つことができます(臨界点まで)。このことは熔融粘性と水の関わりを調べてきた自分の仕事と通じるものがあり、さっそく共同で研究テーマを立ち上げていきました。図は水のイオン積の変化を示しており250℃近傍では常温の水の1,000倍となる事を示しています。この事は水自身が酸・アルカリ触媒の働きをすることを意味しており、この特性を活かすと植物のヘミセルロースやセルロースを水だけの力で加水分解して可溶化する事が出来ます。そして可溶化によって機能性素材や発酵原料としての用途が拡大し、多方面への応用展開が出来るようになりました。その後、幸いなことに国が掲げた「バイオマスニッポン構想」によってバイオマスに注目が集まり、水熱処理法による植物系バイオマスの利用展開に関わるテーマは、科研(B)や佐賀県のミレニアムプロジェクトに採択され、さらにいくつかの共同研究などを獲得することで佐賀大での研究基盤をなんとか立ち上げることができました。特にアルコールを含む高温高压溶媒は両親媒性物質の抽出効率を高めるなど面白い結果が得られ、その後の30年の間に他のテーマを含めて20件の特許を出願し、17件を権利化してきました。

このように自分がやってきた学問体系は、発明、発見、調査の学問で分けるならば発明の学問だと思っています。最も分が悪い学問です。新しい発明に繋がるような何かしらのアイデアが浮かぶと、早く試してみたくていてもたってもいられなくなりますが、試作するためには資金が必要です。ところがその資金は構想だけぶちあげても実証データなどの証拠がないと集まりません。しかし証明するための装置を作る資金が無いからアピールに使えるデータが無い…。そうです、堂々巡りで一番苦勞する学問をずっとやってきました。一方で資金が転がり込んでも実用化に至らなかった経験もあります。写真は科研(B)と持てる研究費をつぎ込んで試作した炭化炉の写真です。ブローラー廃敷料(大鋸屑)を炭化・賦活化してリサイクルし、鶏舎内臭気の軽減も図るシステムを構築しようという試みでした。いくつものアイデアを盛り込んで効率良く炭化と賦活化を行える安価な連続式炭化炉を試作したときの写真です。企業の協力も得られ、製品化を目指したのですが、当時、にわか厳しくなったダイオキシン規制法では炭化炉も燃焼炉と同じ扱いとされ、べらぼうなダイオキシン対策費がもたらすコスト的な問題から実用化を断念した経緯があります。このように多くの失敗といくつかの小さな成功を積み重ねながら退職を迎えたわけです。その間、他学部を含めた

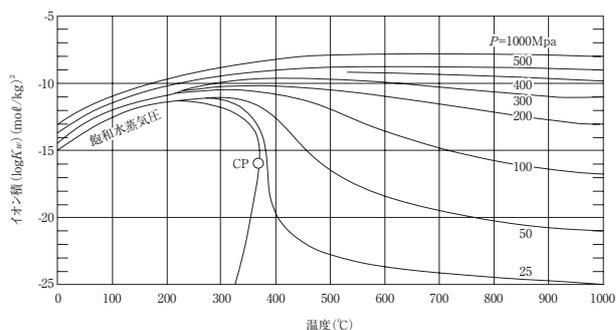


図 水のイオン積の温度変化

多くの先生方にはたいへん有益なご指導をたくさん戴きました。ありがとうございました。研究を手伝ってくれた卒業生・修了生の諸君にもとても感謝しています。事務方の職員の方々にもほんとうにお世話になりました。皆様には心から感謝申し上げます。

そうでした、最後にもう一点。

エネルギー資源も無く、食糧自給率すら低値に落ち込んでしまっている日本です。パイプラインや送電線でエネルギーを融通し合える大陸国家とは異なり、海洋に囲まれた日本が自前で有効に使える資源は人材だと思っています。教育は100年の計、日本が持つ優秀な人的資源を怠りなく育てていくのは必須の課題です。ところが近年、教育、特に大学教育を取り巻く環境が著しく悪化してきました。このことは誰もが気づいていると思います。誰もが気づいているのならちょっとしたきっかけで改善への大きな突破口を開くことができるということではないでしょうか？ 佐賀大学が優秀な人材を輩出しつづけることができるように祈っております。

なお、今年度はやり残した部分を仕上げたいと思います、学長裁量スペースをお借りして招聘教員としてもうしばらく学内をウロウロする予定です。廊下でお会いすることもあるかと思いますがよろしく願います。



写真 試作した連続式炭化炉

新教授紹介

鈴木学部長の巻頭言で紹介されておりますように、令和4（2022）年4月に2名、令和5（2023）年4月には4名の先生方が教授に昇任されました。6名の先生方から、同窓会員へメッセージをご寄稿いただきました。ここに紹介させていただきます。先生方の教育、研究、地域貢献における益々のご発展、ご活躍を同窓会員一同、お祈り申し上げます。

弓削こずえ

食資源環境科学コース 環境科学グループ
灌漑科学分野

平成4（2022）年4月に教授に就任いたしました弓削こずえと申します。この度の昇任は、農学部の教職員の皆様ならびに本学の卒業生の皆様のご支援の賜物であると深く感謝申し上げます。

私の専門は農業農村工学で、食資源環境科学コースにおいて灌漑工学、利水工学および農村計画学などの教育を担当しております。学生の教育に際しては、農業農村工学分野の行政機関や民間企業でご活躍の卒業生の皆様にたいへんお世話になっております。私の担当科目に講師として登壇いただいたり、多くの学生をインターンシップに受け入れていただいたりしています。こうしたご支援のお陰で在学

の専門分野の学習意欲が向上するとともに、職業感覚が醸成されており、かけがえのない貴重な学びの場を頂戴しております。

研究面では、「農地における水管理技術の高度化」を主なテーマとして取り組んでおり、佐賀県をはじめとする九州各地のフィールドで調査を行っております。共同研究等を通じて本学出身の技術者の皆様に多大なるサポートをいただいております。農業の最前線の取り組みや課題などに触れてたいへん良い勉強をさせていただいております。

今後は農学部の教育および研究のさらなる発展を目指し、多くの人材を輩出することで、同窓会に貢献できるよう努めたいと考えております。同窓会の皆様にはたいへんお世話になることと思いますが、ご指導・ご鞭撻くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

吉賀 豊司

（平成2年卒 園芸・応動）

生物科学コース 植物保護科学グループ
線虫学分野

令和4（2022）年4月1日付で教授に昇任しました生物科学コースの吉賀豊司です。私の専門は線虫学で、佐賀大学農学部では昭和28（1953）年に横尾多美男先生が着任されたのを始めとし、その後、石橋信義先生、近藤榮造先生と続く、線虫を専門とする4代目教授となりました。線虫の研究・教育が佐賀大学で行われるようになって今年で70年になります。日本の大学で線虫学を教えるところは少なく、我々は最も古くから続く線虫の研究室です。

私は昭和61（1986）年に佐賀大学に入学した同窓生です。平成7（1995）年に博士課程を修了するまでの計9年間を佐賀大学で学生としてお世話になりました。博士号取得後は、アメリカの大学や理化学研究所でのポストクを経て、1999年10月から佐賀大学農学部の線虫学分野の助手に採用され、助教、准教授を経て現在に至っています。

私が学生時代に所属した研究室、応用動物学教室（応動）では、毎年、植物病理学教室とのソフトボー

ルや飲み会、園芸学科内でのソフトボールなど、さまざまな行事が行われていたのがとても懐かしく思い出されます。今から考えると、学生も教員も当時は余裕があったものだと改めて思いますし、またその余裕が活力の源となっていたように思います。時代の変化がますます加速していく中、いかに生きるかを考えるためにもそのような余裕がこれからより重要になってくると感じています。

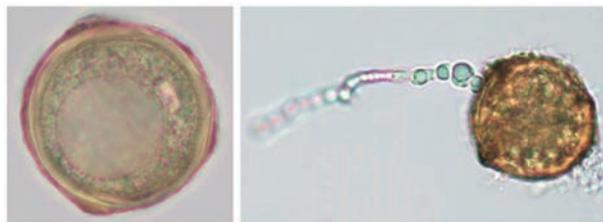


コロナ禍明け最初の線虫研・システム研の合同BBQ

草場 基章

生物科学コース 植物保護科学グループ
植物病制御学分野

令和5(2023)年4月から教授に昇任しました生物科学コースの草場と申します。専門は植物病理学です。授業は学部の2年生後期に植物病理学、大学院1年生前期の植物病原学特論・植物感染病学特論を担当しております。主な研究テーマは「タマネギべと病」に関する研究です。本病は平成28(2016)年に佐賀県を含む西日本の産地で大発生し、未曾有の大被害をもたらしました。現在でも、本病はタマネギ生産を脅かす最も大きな問題となっています。本病は土壌伝染性病害として知られ、その伝染源は土壌中で耐久生存をしている原因菌の卵胞子です。このように農業の届かない土壌中に伝染源があるため、本病の防除は極めて困難なものとなっています。現在、私は本病の土壌伝染の制御に向けて、土壌微生物を利用した生物農薬の開発に取り組んでいます。本研究によって、全国第二位の生産量を誇る佐賀県のタマネギ生産の発展に貢献できればと考えています。私の強みは「タマネギべと病」



正常なべと病菌の卵胞子

微生物が寄生した卵胞子



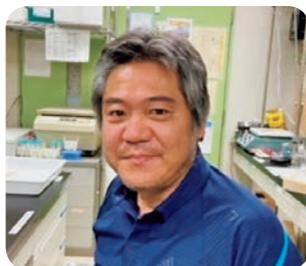
つり玉で貯蔵されているタマネギ

の研究に代表されるように、地域農業に密着した研究を行っていることです。これまで、タマネギ産地を中心に県内の農業現場には足繁く通って参りました。そして、県内の生産者が直面している病害を含めた様々な問題について考える機会を得ることができました。これからは、このような研究活動を通じて得られた経験を教育に活かして行きたいと考えております。大学の使命である先端科学分野の研究を農業現場の問題と結び付けることで、地域農業の抱える問題の解決を可能とする人材育成に努めて行きたいと考えております。

古藤田信博

生物科学コース 園芸科学グループ
果樹園芸学分野

令和5(2023)年4月1日の人事で昇任させていただきました古藤田です。この場をお借りして関係各位に御礼申し上げます。私は10年前の平成25(2013)年7月1日に佐賀大学農学部に着任しました。



専門は果樹園芸学で、カンキツ研究の伝統ある研究室を担当しています。初代岩政先生、2代目仁藤先生、前任の松本先生を継承することになります。

カンキツ遺伝資源研究基盤を整えられた岩政先生は、退官記念誌「橘花匂う」によると昭和44(1969)年に農林省園芸試験場から異動してこられています。実は、私も前職が農研機構果樹研究所(カンキツ研究拠点)で、岩政先生は大先輩とい

うこととなります。前任の松本先生も前職は農研機構で、当時、松本先生の薫陶を受けていました。当研究室は発足以来、カンキツ近縁属野生種の収集・維持、極早生ミカン探索、多胚性、雄性・雌性不稔性、品種識別、組織培養および機能性成分研究で有名でした。

現在の果樹園芸学分野では、カンキツ遺伝資源を活用し、機能性成分の探索・活性評価、ポリメトキシフラボン等の蓄積に関する量的遺伝子座同定、大規模ゲノム情報の解析、花芽形成誘導タンパク質FTの機能などについて、日々研究を行っています。着任以来、当研究室の卒業生は40名(うち修士9名、博士1名)となり、海外のPh.Dを目指す卒業生もいます。

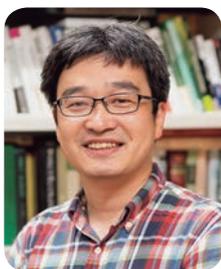
最後に私自身の趣味ですが、7~32歳まですべての年代でサッカークラブに公式所属し、プレーしていました。今年からは一念発起して、小島先生、柳田先生、上田先生、北垣先生らが常連の佐賀大職員硬式テニスクラブにも参加させていただいております。少年老い易く学成り難し。肝に銘じて精進する所存です。

徳田 誠

生物科学コース 植物保護科学グループ
システム生態学分野

令和5(2023)年4月1日付で教授に昇任させていただきました徳田と申します。私は平成23(2011)年10月に佐賀大学農学部に着任しました。佐賀での教員生活は11年半を超え、今までに所属した組織の中では佐賀大学農学部の在任期間がもっとも長くなりました。この間、県内はもとより、他県を訪れた際にも農学部の同窓生と関わる機会がしばしばありまして、皆様が非常に親切に対応して下さいますのでとてもありがたく、また心強く感じております。

着任前は主として昆虫の研究をしていましたが、着任後は生き物好きで研究熱心な大勢の学生たちに囲まれ、佐賀県内に生息している哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類、植物、微生物を含む様々な生物を対象として、生態系や希少種の保全、外来種・病害虫・鳥獣害対策などにも取り組むようになりました。詳しい研究内容につきましては、本会報27号で研究室紹介をさせていただきましたので、そちらをご参照いただけますと幸いです。



佐賀大学の周辺は、脊振山地や太良山系、佐賀平野のクリーク、有明海と沿岸の干潟など、豊かな自然で満たされており、そこには貴重な動植物が多数生息しています。このように恵まれた環境の中で、これからも学生たちと一緒に生物多様性に関する研究を続け、生態系保全と農林水産業振興とを両立させる道を模索していきたいと思っています。

今後とも同窓生の皆様のご支援ならびにご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしく願いいたします。そして、もし生き物関係で何かお役に立てそうなことがありましたら、ぜひお気軽にお声がけいただけますと幸いです。



多久市のクリークでの魚類調査

光武 進

生命機能科学コース フードサイエンスグループ
食糧安全学分野

令和5(2023)年4月に農学部の教授職を拝命しました光武です。11年の札幌生活の後、佐賀大学に着任したのが平成25(2013)年9月で、もうすぐ10年になります。私は中学／高校時代を佐賀で過ごしました。当時、20数年ぶりの佐賀生活で、変わっていない街の風景や、大きく変わった地域もあり、懐かしさと驚きで一杯の日々だった事を覚えています。

以前の私は細胞膜の構成脂質の一つであるスフィンゴ脂質の生理機能に関して、生化学、分子生物学、細胞生物学的手法を用いて研究してきました。佐賀大学に来た時に、「せっかく佐賀に来たし、農学部に来たので新しい事を始めよう」と思い、味覚に関



わる受容体の研究をスタートしました。令和3(2021)年のノーベル生理学・医学賞は温度受容体と感覚受容体の研究でした。味覚の受容体はこれらより早く同定されたにも関わらず、未解明の部分が多く残されていました。さらに、これら受容体が消化管ホルモンの分泌を介して全身の代謝を制御している事が明らかになってきました。「味を感じる事」と「健康」を結びつけるこの研究領域は、農学部の学生達と研究するのに魅力的な課題だと感じました。しかし、やってみると分子自体のハンドリングが難しく、当時の学生達には随分と苦労をかけたことを思い出します。その後、この研究が軌道に乗り、同じ研究室の濱教授が海苔から単離したユニークな分子の中から、甘味受容体に作用する分子の同定にも成功しました。

「美味しく食べる事」が「健康」をもたらしてくれたら、幸せじゃないですか？ 私は今後も、「美味しさ」と「健康」を結びつける様な研究を行っていきたくと思っています。同窓会の皆様におかれましては、今後とも温かく見守って頂き、時にご指導・ご鞭撻を頂ければ嬉しく思います。

第12回佐賀大学ホームカミングデーの開催

【期日】 令和5年10月下旬～11月上旬の土曜日 【場所】 佐賀大学本庄キャンパス

【目的】 佐賀大学の卒業生に母校佐賀大学を訪問していただき、母校の現状を知り、恩師・学友との再会と交流を深め、今後の母校へのご理解とご支援をいただければ幸いです。

【対象】 卒業年等にかかわらず、すべての同窓生と本学の名誉教授

【内容】 大学の近況報告、講演、在校生によるアトラクションなど

※詳細は決定次第、佐賀大学校友会のホームページでお知らせします。

(URL <https://koyukai.admin.saga-u.ac.jp/hp/event.html>)

第11回佐賀大学ホームカミングデー（令和4年11月5日開催）の様子は、こちらからご覧ください。(URL <https://youtu.be/lvC881PGJxM>)

【お問い合わせ先】

佐賀大学校友会事務局

TEL : 0952-28-8390

E-mail : koyukai@mail.admin.saga-u.ac.jp



会員の広場

学習資料「一家に1枚 ウイルス～小さくて大きな存在～」の製作監修に携わって

北海道大学大学院農学院 川久保 修佑 (R4院修了 (R2卒 生物・植ウ))

発明の日である4月18日を含む1週間は、科学技術について多くの方々に理解と関心を深めていただき、日本の科学技術の振興を図るため「科学技術週間」と制定されています（昭和35年2月26日閣議了解）。それにあわせて、文部科学省ではひろく国民の皆様へ科学技術に関する知識を適切に捉えていただくことを目的として、学習資料「一家に1枚」を毎年発行しています。第19作目となる令和5（2023）年度は「ウイルス～小さくて大きな存在～」をテーマとして発行され、微力ながら「一家に1枚 ウイルス」製作チームの一員として製作監修に携わらせていただきました。



「一家に1枚」は、基礎的・普遍的な科学知識を中心としたポスター形式の学習資料であり、見た目も美しく、大人から子供まで興味を持っていただけることをコンセプトに製作されています。全国の小中高等学校や大学等だけでなく、博物館・科学館等を通じてひろく配布されています。「一家に1枚」のテーマは、毎年公募によって決定されています。応募に際し、理化学研究所の小嶋将平基礎科学特別研究員を中心に、大学や研究所の垣根を越えた8名のウイルス学研究者によって製作チームが結成されました。特徴的なのは、私を含め製作チームの半数である4名が博士課程に在籍する大学院生だったこ

とです。若手研究者同士の強い繋がりや熱い想いをのせて応募した結果、幸運にも我々のテーマを採択いただき、製作監修させていただき運びとなりました。

「一家に1枚 ウイルス」では、ウイルスの基本知識や人類との関わりの歴史と共に、地球上でどのような存在であり、人間社会にどのような影響を与えるのかを多角的な視座から紹介しています。ウイルスと聞くと、ヒトに感染症を引き起こす怖い存在だというイメージが強いですが、実は身の回りにありふれた存在です。ウイルスはヒトからだけでなく、植物やプランクトン、細菌などのあらゆる生物から見つかっており、地球上には 10^{31} 個ものウイルス粒子が存在すると言われていています。そのようなウイルスの多くは生態系の中で重要な役割を担っており、例えばウイルスが存在することで元気に育つ植物がいたり、赤潮の消失にウイルスが関わったりしています。一方で、ウイルスが様々な要因により自然環境中から人間社会に侵入することで、ヒトに重篤な病気を引き起こしたり、家畜や農作物に感染することで産業に甚大な被害をもたらしたりします。しかし、実はウイルスを使った技術が病気の治療に使われていたり、害虫の防除に活用されていたりと、社会の役に立っている事例も数多くあります。令和2（2020）年に始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、我々はウイルスが人類に与える影響の大きさを痛感することとなりました。ウイルスのことをただ単に恐れるのではなく、正しく理



学習資料「一家に1枚 ウイルス～小さくて大きな存在～」
科学技術週間のホームページ (<https://www.mext.go.jp/stw/series.html>)から無料でダウンロードできます。

「一家に1枚 ウイルス」
特設ウェブサイトへの
アクセスはこちらから！



解することが、より良い社会へつながる一歩だと思
います。科学技術週間のホームページからポスター
のPDF版を無料でダウンロードできますので、「一
家に1枚 ウイルス」を通じて、ウイルスを身近に
感じ、これからどう付き合っていくべきかを考える
きっかけとなれば幸いです。

また、「一家に1枚 ウイルス」のポスターをさら
に詳しく解説・紹介する特設ウェブサイト、解説動
画、PR動画も併せて公開されています。特設ウェ
ブサイトは公開後1ヶ月で1万5,000を超えるアク
セスがあり、本学習資料への高い関心が窺えます。
解説動画には、バーチャルサイエンスコミュニケー
タを起用し、子供達にも楽しんでもらえるような内
容になっております。ぜひみなさんもお覧いただ
けたらと思います。

ウイルスは、その存在が発見されてからまだ約
130年しか経っていません。ウイルスによって引き



文部科学省エントランスにて展示される
歴代「一家に1枚」シリーズ

起こされる様々な現象には未だ解明されていないこ
とも多く、我々は部分的にしかウイルスのことを理
解できていないと思われます。ウイルスは目に見え
ないほど小さな存在ですが、人間社会を大きく変え
てしまうほどの大きな存在でもあります。このポス
ターをご覧になると、そんな不思議なウイルスに、
きっと皆さんも魅力を感じると思います。歴代の「一
家に1枚」シリーズでは、周期表やヒトゲノムをテー
マとしたものが発行されており、どれも非常に美し
く、好奇心を掻き立てられるようなポスターになっ
ています。実際に私が中高生の時も、学校の理科室
などで「一家に1枚」が掲示されており、私自身が
科学に興味を持つきっかけのひとつとなった思い出
深い学習資料です。この「一家に1枚 ウイルス」
をきっかけに、ウイルスの驚異的な世界に誘われ、
研究の道を共に志す子供達がいたら、こんなに嬉し
いことはありません。

最後に、「一家に1枚 ウイルス」の製作にご協力
いただきました、文部科学省科学技術・学術政策局
人材政策課、理化学研究所、日本ウイルス学会、お
よび写真提供にご協力いただきました農研機構富高
保弘先輩 (H19 鹿児島連大院修了 (H16 院修了)),
そして私をウイルスの世界へと導いてくださった佐
賀大学名誉教授 (前農学部長) 大島一里先生をはじ
め、すべての皆様に厚く感謝と御礼を申し上げます。

山菜の栽培法と食べ方講座 ①オオバギボウシ (大葉擬宝珠)

田中 欽二 (S39卒 農学・保護)

園芸用としても人気の高い
ギボウシのなかで、オオバギボ
ウシは日本各地に自生していま
す。大きな株であれば、2月頃
に株分けして植え付けます。4
月上旬に新芽 (写真1) を収穫
します。さっと (30秒程度)
湯がきます。春の息吹を感じる
瞬間です。酢味噌で食べると最高です。その後には伸



びた若葉は5月中旬頃までは湯がいて食べることが
できます。東北地方では「うるい」と呼ばれ、人気の
ある山菜の一つです。6月中旬の梅雨期から咲き始め
る淡い紫色の花 (写真2) も食用になります。酢漬け
したものはサラダに合います。土手に植えると土砂崩
れを防ぐ効果があり (写真3)、樹木の周囲に植える
ことで、雑草抑制にも役立ちます。三瀬にある私の山
菜園にはいろいろの種類が生い茂っています (写真4)。
ぜひ、見学においでください。



写真1 4月上旬の新芽 蔽木町天川地区の方言として「たけな」と呼ばれている



写真2 ギボウシの花 6月上旬から咲き出す。花は酢漬けし、サラダのトッピングになる



写真3 土手に植えると土砂崩れを防ぐ



写真4 5月上旬の山菜園（三瀬）

ウド、タラノキ、イタドリ、コゴミ、コシアブラ、ギボウシ、コンブリーなどが生繁っており、初夏から秋にかけてテンブラの材料に事欠かない

植物保護学関係者新年会

令和5（2023）年1月7日（土）に植物保護学（植物保護学、植物病理学、植物ウイルス学、植物病制御学）の関係者が集まって、毎年恒例の新年会（ひしの実会）が開催されました。佐古宣道先生（元佐賀大学長）、田中欽二先生をはじめ大島先生、草場先生にご参加いただき、総勢21名の会となりました。これまでのコロナ禍のため、令和2（2020）年以来

成富 毅誌（H24院修了（H22卒 応生・植病））

の3年ぶりの開催となりました。今回は卒業して1～2年の若い後輩から50年以上の大先輩まで、幅広い世代での交流となり、新しい出会いもあって大いに盛り上がりました。その後の2次会でもたいへん有意義な時間を過ごされたとのこと。今後とも植物保護学関係者の絆を深めるための会として、盛り上げていければと思っています。

支部だより

佐賀県支部

第16回佐賀県支部総会・懇親会が5月26日（金）佐賀市の「グランデはがくれ」で、4年ぶりに会員26名が一堂に会して開催されました。

総会には、来賓として全学同窓会から水田会長、農学部同窓会から森田会長が出席され、花を添えて頂きました。また、農学部創立60周年事業（H27年）で当時の農学部同窓会長であった川副操氏が提案、企画され、農学部に贈られた歌のCDを初めて会場で流し会員の皆さんが聴き入っていました。

懇親会では、久しぶりに顔を合わせての開催でしたが、お互いの近況報告や趣味、学生時代に遡っての昔話などに話が弾み、また、お酒も酌み交わしながら楽しいひとときを過ごすことができました。懇親会の終わりには恒例により、水田全学同窓会長の先導のもと、会長の「巻頭言」、そして全員が肩を組んでの学生歌「楠の葉の」の斉唱などで盛り上がり

り、気持ちも若返ったようでした。次回も多くの会員の方のご参加をお待ちしています。

佐賀県支部幹事長

溝口 善紀（S53卒 農学・病理）



農業自営者の会支部

令和5(2023)年から、前任の大庭英二会長(S51卒 園芸・果樹)の後を引き継いで会長を仰せつかっている末次です。バラを栽培して38年になります。ここ数年はコロナ禍のため、会としての積極



的な活動ができずにいました。今年は会員の連絡を密にして、総会や交流会などを行う予定です。皆さまの積極的なご参加、ご協力をお願いいたします。

末次 博幸(S54卒 農学・作物)

同窓会からのお知らせ

農学部卒業生の皆様へ 会費納入のお願い

卒業生の皆様と同窓会事務局とのつながりを変わることなく保っていくために「会費納入」をお願いします。

農学部同窓会の運営経費は、会員の皆様から納入いただいた会費で賄われております。同窓会の運営が母校や後輩学生への支援につながっていることにも想到いただき、重ねてお力添えをお願いいたします。

〈会費〉

- (1) 1年会費は2,000円(毎年納入していただくものです)
- (2) 3年会費は6,000円(3か年分まとめて納入していただくものです)
- (3) 70歳未満の方の終身会費は30,000円
- (4) 70歳以上の方の終身会費は15,000円

会費は納入いただいた時点以降の取り扱いであり、納入以前の未納については問いません。

〈手続き〉

会費の納入方法は、ゆうちょ銀行振替口座への振り込みとなっています。

同窓会事務局(Tel0952-23-1253)まで連絡をいただければ、払込取扱票をお送りします。

編集後記

- 待望の同窓会総会と交流会が4年ぶりに開催されました。今号ではその時の様子をできるだけ多くの写真と参加者のメッセージとして掲載しています。当日の盛り上がりや熱気が少しでも伝わりましたら幸いです。
- 農学部からは鈴木新学部長の巻頭言をはじめ、3月に退職された4名の恩師の先生方からの思い出の記、教授に昇任された6名の先生方からの抱負について寄稿いただきました。全学ならびに農学部の同窓会長賞を受賞されたお二人と同窓会感謝状贈呈者の川副操様、おめでとうございます。

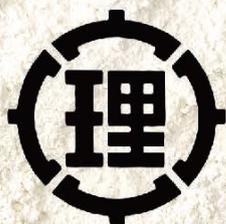
ございました。関係各位のますますのご活躍とご健勝を願うものです。

- 会員の広場では3名の方に寄稿いただきました。新型コロナウイルス COVID-19に関連してウイルスへの関心を高めていただき、山菜を食して体を健康に維持していただければと思います。
- 支部だよりでは佐賀県支部と農業自営者の会支部からの情報を掲載しています。より多くの支部からの活動報告を期待しています。

(編集担当代表 田代 暢哉 S54卒 農学・病理)

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、長引いたコロナ禍で経済的にも厳しい状況の中、協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げますとともに、協賛各社の益々の御発展をお祈り申し上げます。



理研農産直売所

理研農産化工のオンラインショップが新規オープン！



人気商品を詰め合わせた
理研おすすめセットも好評販売中！



サラダ油・小麦粉といえば、
やっぱり理研



理研農産直売所



URL : riken-nosan.store



オンラインショップの
情報はこちらから



理研の商品を使用したレシピや
会社情報はこちらから



JAグループ佐賀 消費拡大運動実施中!

食べよう! 飲もう! 飾ろう!



耕そう、大地と地域の未来。



JAグループ佐賀

JA佐賀中央会/佐賀市栄町3番32号 TEL.0952-25-5115

JAグループ佐賀

検索



MORIMITSU

Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>



青果をとおして 健やかな暮らしを支えていく



福岡市中央卸売市場



福岡大同青果株式会社

代表取締役社長 丸小野 光正 (S 52卒)
監査役 草場 昭夫 (S 57卒)

〒813-0019 福岡市東区みなと香椎3丁目1番1-204号 TEL(092)235-8950(代表) <http://fdydo.co.jp>

藤井重隆(課長) (H 8卒)

村井裕樹(係長) (H 8卒)

中村春華(係長) (H 28卒)

(旧姓 石志)

上野純弥(係長) (H 28卒) (院 H 30卒)

小柳文乃(係長) (H 30卒)

西田雄輝 (R 2卒) (院 R 4卒)

*Aiming for evidence-making that is appreciated by Japanese farmers
and trusted by researchers around the world*



一般社団法人

プラントヘルスケア研究所

Think globally, start immediately, and act locally for plant healthcare

840-0051 佐賀市田代 1-2-12
Mail tashirongreen12@gmail.com